岡大医短紀要，4：121～124，1993
Bull. Sch. Health Sci. Okayama Univ.

基礎看護技術学内実習における発見学習方式の試み
－食事・排泄の援助－

中西代志子・近藤益子・池田敏子・徳永順子
大井伸子・前田真紀子・高田節子

An Experiment of the discovery study system in basic nursing technique in intramural practice
—Help of eating and excreting—

Yoshiko NAKANISHI, Masuko KONDO, Toshiko IKEDA, Junko TOKUNAGA
Nobuko OI, Makiko MAEDA, Setuko TAKATA

The content of nursing education and the effective ways of studying nursing have been investigated by teachers of nursing. Therefore, in the lesson of "Basic Nursing Technique" did we examine the educational way in which the students' will to study nursing can be heightened and the students are able to work independently and creati vely. we focused on the educational way which adopted the discovery study system in the lessons of "Help of Eating" and "Help of Excreting". From the viewpoint of the students' intention to study and their work, the effect of this educational way was researched according to their self-appreciation.

As a result, the following four points were made clear by the introduction of the discovery study system. (1) The students could cooperate more easily in studying nursing. (2) The students' interest in nursing was heightened more than before. (3) The students could enhance their will to study nursing and work independently. (4) The items of "Sense of Purpose" and "Ingenuity" were less evaluaoed than the other items.

Key Words：発見学習　食事の援助　排泄の援助　体験学習　教育効果

はじめに

平成2年度の教育カリキュラム改正に伴い看護教育の教育内容や効果的な学習方法についての検討がなされている。本学における「基礎看護技術」の授業においても，学生が学習意欲を高め，主体的に創意工夫をしながら学習できる教育方法を検討している。そこで，従来のクラス全体に講義をし，そのあとグループで実習させる集団授業方式から，学生に主体性をもたせる為の発見学習方式[1)]を試みとして一部の授業に取り入れた。今回，食事の援助及び排泄の援助の授業展開に植村のいう発見学習方式[1)~3)]の一部を導入し，従来の集団学習方式の授業と比較した。その結果を，学習に対する学生の意識と行動の観点から学生の自己評価をもとに考察したので報告する。

研究方法

対象は本学1年生73名で，対象とした単元は生活の援助の中から食事の援助及び排泄の援助とした。授業の展開は1単元に2回の授業で225分とした。授業の進め方は，グループ学習とし，1グループ4人で18グループに分けた。教官は，3グループを1人が担当し，全体発表後講評とまとめをした。授業全体の流れは図1に示す。授業のオリ

岡山大学医療技術短期大学部看護学科

エンテーションと目標を明示した後は，グループ学習と自由なディスカッションを中心にすすめた。学生に示した条件としては，グループ全員患者役・看護婦役を体験する。患者設定は自由とする。次に各グループでチェックリストを作成する。その後，既存のチェックリストを配布し，これを参考に各グループで作成したチェックリストに修正を加える。最後にグループ別に学習過程をクラス全体に発表する。発表は，実技・ビデオ・チェックリストの提示等自由とした。

発見学習方式を導入した授業展開に対する学生の意識と行動の反応を，実習終了2日後に学生の自己評価から質問紙法により調査した。回収率は84%であった。質問は，従来の授業展開で実施した「血圧測定法」との比較で回答させた。評価項目は表1に示す竹市らが用いた自主性・創造性・社会性に関する9項目[4]，及び授業内容の理解の深まりについて質問した。評価は5段階評価とし，「どちらともいえない」を3とし，「非常によい」5，「よい」4，「わるい」2，「非常にわるい」1とした。また，この形式の授業展開に対する意見を記述させた。

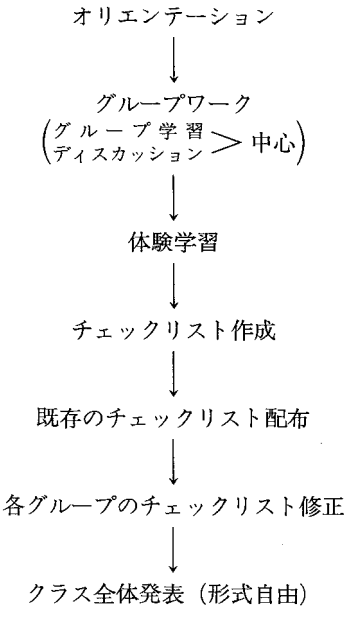

図1　授業の進め方

結　　果

学生の意識と行動の反応を評価した結果は，自

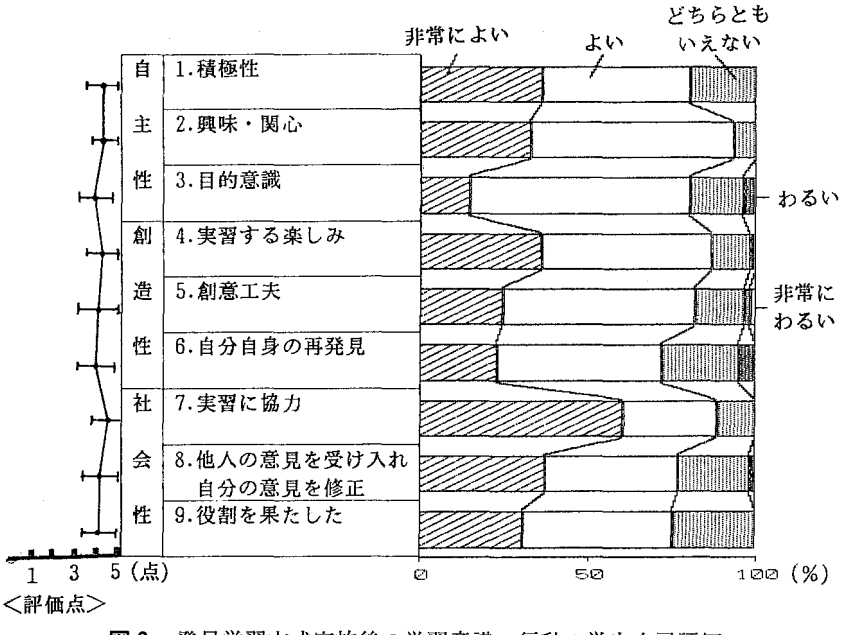

図2　発見学習方式実施後の学習意識・行動の学生自己評価

表1　自己評価項目

区　分	評　価　項　目
自主性	1．積極的に取り組んだ 2．興味・関心がもてた 3．目的意識がもてた
創造性	4．実習する楽しみを感じた 5．創意工夫ができた 6．自分自身の再発見ができた
社会性	7．協力して実習ができた 8．他人の意見を受け入れ自分の意見を修正した 9．役割を自覚し実施できた
	授業内容の理解が深まった

主性平均4.1，創造性4.0，社会性4.2でいずれもよい以上を示した。また授業内容の理解の深まりも4.2で同様によい以上の結果が得られた。つぎに9項目それぞれについて評価した結果を図2に示す。各項目の評価の平均値はいずれも高く，「7．協力して実習できた」4.5「2．興味・関心が持てた」4.3「4．実習する楽しみを感じた」4.2「1．積極的に取り組んだ」4.2「8．他人の意見を受け入れ自分の意見を修正した」4.1「9．役割を自覚し実施できた」4.1「5．創意工夫ができた」4.1「3．目的意識が持てた」3.9「6．自分自身の再発見ができた」3.9の順であった。5段階評価に占める割合では，「非常によい」と評価した項目は，社会性の「7．協力して実習ができた」で全体の60.7％で最も高く，自主性では「1．積極的に取り組んだ」36.1％，創造性では「4.実習する楽しみを感じた」36.1％がそれぞれの中で高い評価を示したした項目であった。また，「非常によい」の評価が低かった項目は，自主性の「3．目的意識が持てた」で14.8％であった。次に，「どちらともいえない」「わるい」「非常にわるい」の好ましくない評価では，「6.自分自身の再発見ができた」「9．役割を自覚し実施できた」「8．他人の意見を受け入れ自分の意見を修正した」が20％を越えた項目であった。「どちらともいえない」がほとんどを占めていた。「わるい」の評価は5項目にわずかにみられ，「非常にわるい」の評価は「5．創意工夫ができた」の1項目にのみ1.6％みられた。この授業展開への今後の希望は，「あったほうがよい」が77％，「どちらともいえない」23％，「ないほうがよい」と答えた学生は0％であった。また，自由記載の意見では，ほぼ全員が「よい」としており，その内多かったものは「新しい発見があった」9名，「授業が印象深いものになり忘れがたい」・「すごく身につく」12名等があった。また，13名は本授業形式の欠点を指摘し，「時間が足りなかった」3名，「患者の設定が難しかった」3名，「実習方法が理解しにくかった」6名，「意欲のないメンバーの存在がやる気をそぐ」1名であった。

考　　察

基礎看護技術の中には，診療の介助のように特殊な技術項目と，日常生活の体験が生かされる生活の援助技術項目がある。今回の発見学習方式の試みは，学生が看護的視野から体験的発想をなしうるのはないかと考え，生活の援助技術の単元から選んだ。その結果，自主性・創造性・社会性・授業内容の理解の深まりにおいて平均4.2の高い評価を示した。これは，学生が発見学習方式を導入することを好ましいと考えていることを示しているといえる。学生の意識と行動の反応を自主性・創造性・社会性からみると，差はわずかであるが社会性が高く創造性が低い値を示した。これは，竹市らによる創造活動を通しての学生の態度育成の研究結果[4]に一致している。

また，平均値の特に高い項目に注目すると学生は，興味や関心をもちながらグループで協力して学習ができ，積極的に楽しく実習をすすめることができたと考えられる。

発見学習方式の利点の中には，理解力・問題解決能力・創造力の育成，学習意欲の強化が挙げられている[2]。今回の結果では創意工夫・目的意識は，平均値も「非常によい」を占める割合も他に比べてやや低い値を示した。目的意識については，学生は本授業形式の欠点として学習方法が理解しにくかったと述べている。このことは，初めての試みであり授業の導入方法の不適切や事前の準備不足が原因であると考えられる。また，学生が設定した条件は，視力障害・麻痺・肥満等の患者が多かった。今回対象とした学生が1年生であった

ことから，他の専門科目の学習進度との関係を考えると，設定患者についての知識と理解が不十分であったことも影響していると思われる。また，創意工夫を育てる為には，思考を深める時間的余裕が必要である[5]。今回1単元225分の授業としたが，創意工夫に示した値がやや低かったこと，「非常にわるい」と評価した学生が1名であるがいたことなどから，1単元の授業展開に要した時間が影響していると考えられる。しかし，学生は，食事の援助では教官が提供した材料以外にラーメンやデザートを持参したり，全体発表の為にビデオ撮影をするなど短時間に意欲的な工夫がなされていた。

次に，社会性は，他に比較して「非常によい」の評価が高く，協力して学習できたことを半数以上の学生が強く感じたことがわかる。学生は，従来の講義中心の教育では，学生同士ディスカッションしながら協力して学習する機会が少ない。そこで，このような形式の授業がかえって印象深いものになったと考えられる。好ましくないと評価した項目は，従来の授業展開との間に差を認めなかった学生が比較的多くいたことを示している。その中でも，自分自身の再発見は平均値が最も低く，「非常によい」の割合も低い値を示した。これは，短時間では達成が難しい項目であることを示していると考えられる。しかし，今回の授業形式に対する肯定的な意見や，今後の実施希望が高いことから，学習に対する学生の意識は高まり，行動においても積極的になったと考えられる。

結　　論

学生の主体的な学習活動を期待して，食事の援助及び排泄の援助の授業展開に発見学習方式の一部を導入した結果，学生の自己評価から協力して学習ができた。学習に対する興味や関心が高まった。学習意欲を高め自主的に行動ができた。目的意識・創意工夫は，他の項目に比較して低かった。以上の4点が明らかとなった。

今回は学生の自己評価を中心に報告した。授業内容の習得度については，客観テストを実施しているので，今後は，これらのデーターを基に，より効果的な基礎看護技術の授業展開の方法を検討していきたいと思う。

本稿の要旨は第3回日本看護学教育学会において発表した。

文　　献

1）植村研一：看護学教育の体系化をめざして．日本看護学教育学会誌　2：48-54，1992.
2）植村研一：プログラム学習．医学教育15：423-425，1984.
3）植村研一：医療人の情意教育の現在と将来．薬業時報社，東京．1991.
4）竹市敏子，柳澤靖子，千草真値代：特別活動による学生の態度育成の試み．第21回日本看護学会集録（看護教育）23-26，1990.
5）天城　勲，奥田真大，吉本二郎(編)：現代教育用語辞典，第一法規，東京．338-339，1973.
6）成田　伸，石井トク：体験学習の文献的考察．看護教育　34：91-100，1993.